

## 西独ヴァイツゼッカー演説による問題提起について

— ドイツの「過去の克服」に関する年代記1985—2003年：（1）1985—89年 —

山 本 務\*

### 要 旨

現代の巨大な主題として、国民が負債を抱え込んだ過去といかにして対決し取り組むのかという困難な問いが存在する。共産主義政権崩壊後の中・東欧で、ナチ占領下のフランスに対して、ホロコースト進行中のアメリカ合衆国は？ そして大日本帝国以降の戦後日本は？ そのなかで特異な位置を占めるのが、戦後の東西分断下のドイツ連邦共和国である。ユダヤ人等大虐殺を実行したナチ第三帝国の継承国として自らの歴史的な過去に対峙しながら現在を形成し未来を構想することが、特に1980年代以降の戦後ドイツの中核となったからである。その実質を豊かに示したのが、1985年、戦後40周年のヴァイツゼッカー大統領演説であり、その主題は、第一に、敗戦か解放か零時刻かという終戦日の歴史的規定に関する問題提起であり、第二に、国家による追悼対象の選出、第三に、ホロコースト進行下ドイツ人による「不作為の罪」の問題提起、第四に、過去の想起の要請、そして第五として、欧州分断（東西冷戦）と第2次大戦との連関として索出可能である。

これらのあまりにも壮大にしてかつ根源的な問題提起に対して、ドイツ連邦議会、ドイツ国民と学者たちは、どのように政策的に、あるいは批判的に応じてきたのか？ また世界のドイツ研究者は？ 他のヨーロッパ諸国は？——第一主題に関しては、同演説から10年後の戦後50周年に国民的規模の大論争として現象したことが確定可能であり、また第三主題としては、それが、現代文明の根幹に関わる普遍概念「作為と不作為」問題の一環であると把握し直され、ヴァイツゼッカー演説を包括し乗り越えるに至るまで、やはり一定の時間を要したのである。したがってその対応と回答は、歴史的出来事の記述と、時を隔てた著作挙示を併せ持つ「年代記」としてさしあたり確定され得るのである。2003年までを含む結論として言えば、それは例えば、ヴァイツゼッカーが限定した「個としての想起」ばかりではなく、それを乗り越える集団的な「想起の文化」「想起の行使」「想起による政治」という研究分野を産み出したことが判明し、そして壁崩壊が欧州分断の克服へと接続される「89/90年」の現実の到来との取り組みとなったことが把握され得るのである。

キーワード：戦後、ホロコースト、不作為の罪の問題設定、1945年5月8日、敗戦と解放と。

---

\* 九州看護福祉大学看護福祉学部社会福祉学科

## はじめに

本稿は、「主題＝ナチズムの過去との対決」に関する史実の確定と主題の索出、その展開の仕方を哲学・思想並びにその関連分野の研究成果として確定し、年代記として編むという試みである。時期としてドイツの戦後40年目を起点とし戦後50周年を介して2003年の時点に至るまでとする。それは筆者自身が既に本誌に発表した諸論文<sup>1)</sup>に対する脚注的性格のものであるが、しかし、「過去の克服」の観点に基づいた史実の取捨選択による確定と、研究史を展望する精選された「著作目録」(ビブリオグラフィー)を併せ持つ独立した性質を保つものとして提示したものである。

こうした主題の追求は、2003年の今日から見て、その対象に対して或る程度の歴史的距離をもつ場合、つまり1945年から1968、1970年までの時期に限定するならば、政治学者や文学者、歴史家の仕事として日本でも一定の研究成果が一般の読者対象を得ている<sup>2)</sup>。しかし、これらにおいても1980年代以降の対象となると、特にベルリンの壁崩壊をはさむ「冷戦崩壊以降」となると、手付かずのままである。しかしまぎれもなく我々は、その同時代を生きており、なんらかの世界像、同時代史観なくして生きているわけではない。そこでヨーロッパにおいて第2次世界大戦と、それと相即する前代未聞の人種大量虐殺を惹き起こしたドイツが、その過去とどのように向き合いながら戦後という未来の構築をはかっているのかということは、そのドイツの現在を規定する重要な要因であるという認識に基づいて、その認識の実現として年代記を編むことを、たんなる年表の次元を超えて事典風に記述してみたい。これが、本研究の目的である。

「過去の克服」という言葉は、戦後西ドイツにおいて „Vergangenheitsbewältigung“ „Aufarbeitung

der Vergangenheit(Geschichtsaufarbeitung)“という二つの言葉と概念として1960年代に生まれたが、本稿は、それが国家元首ヴァイツゼッカーによる1985年演説<sup>3)</sup>において「国家意志」の表現として顕在化し実質と内容を得たものと見なすことを前提とする。歴史的な起点を1985年に求める所以である。その前史として1970年のブランド首相によるポーランド、ワルシャワゲットー記念碑前での「拝跪」(Kniefall)という沈黙の行為などが見られるが、そのことへの言及は、本稿でも省略することはなかった。

「過去の克服」—それは、ドイツ第三帝国、ナチズムの歴史的な過去を封印したアデナウアー時代の「沈黙の1950年代」には、カール・ヤスパース著『罪責問題』や亡命先アメリカから帰国したアドルノなどごく少数の哲学者によってのみ着手遂行されたに過ぎなかったが、おもに「1968年の青年の反乱」を介してようやく社会的に表面化し、広くナチドイツと向き合い、これを事実として究明し、「公共の記憶」として定着させ、また行使する作業として定着化する。そしてドイツから発したこの営みは、1990年代のヨーロッパ諸国を強く刺激することとなり、スイスを始めとして大戦下での銀行によるナチ金塊への関与の究明と、その損害賠償問題、企業による強制労働への賠償問題、これらへの回答という行為へと続く。本稿は、戦後ドイツを脈打つ主題が、ヴァイツゼッカー演説によって提起された後、その後の18年間に於いてどのように具体化されたのかを時系列に沿って追跡し、その結果を年代記として提示し、同時代ドイツ・ヨーロッパの政治と文化を含んだ精神史がどのように開かれるのか、それを探究する試みの一端でもある。分載としてとりあえず、「89年まで(1)」を発表する。

日本における「過去の克服」に関しては、

別途の年代記を必要とする。この関連で言うならば一昨年、小熊英二著『民主と愛国』<sup>4</sup>は、「戦後」という場合に、1970年前後を切れ目にして、その前と後とで「二つの戦後」観が登場したという見方を提示し、改めて、その前の戦後思想家たちの言説を掘り起こして提示することに寄与した。筆者もかねがね70年前後で、戦後日本の哲学・思想研究はその風景を一変させ、丸山眞男、竹内好などの掘り起こしと継承が必要だと考えていた<sup>5</sup>だけに、注目すべき著作だと考える次第である。ただし小熊著は、その対象を戦後日本にのみ限定しており、同時代の日本以外の世界の思想動向への展望が見られない。しかし「世界に開かれた日本」「世界における日本」という視野を19世紀の中葉幕末維新以来再び獲得したということ、このことが他ならず敗戦の廃墟の中から自らを形成し認識する戦後日本の少なくともひとつの基軸であり、そのような「世界」を視野に入れるのは必須であろう。そのひとつとして筆者は、とりあえずは「年代記」として戦後のドイツ・ヨーロッパを視野に入れようとするものである。

記述方法であるが、原著の場合、紙幅の事情で、その標題の邦訳のみにとどめ、原著題と出版社の併記は省略し、また邦訳書出版の有無の記述にとどめ、訳者と出版社名は省略したが、いずれも容易に検索出来るはずである。その点は、記号[→]によって示した。また、年鑑 „Brockhaus“, „Zeitungsjahrbuch Deutschland“ などの出典の枚挙、 „UNIVERSITAS“ 等雑誌論文の挙示も紙幅の制約上割愛したことを諒とされたい。また翻訳書ではなく、日本人自身による著作に関しては、今回はこれを省略して、別稿を俟たなければならない。

## 1985年

5月5日 ビットブルク墓参問題。第2次大

戦終結40周年にアメリカ大統領ロナルド・レーガン Reagan, R. (1981-89年米大統領、1911年生まれ) は、西独でヘルムート・コール Kohl, H. 首相 (1982-98年西独、統一ドイツ首相、1930年生まれ) とともに同首相の強い願望によりラインラント・プファルツ州、ルクセンブルクと国境線沿いの町ビットブルク Bitburg の独兵士共同墓地に訪問。前年9月コール首相は、仏ミッテラン大統領と第1次大戦 (第2次大戦にあらず!) 中の戦場ヴェルダンで独仏和解の儀式に功を奏していたが、今回のビットブルクにはナチス武装親衛隊の成員49名の遺体が埋葬されていることが明らかになったことを押し切った訪問ゆえに、レーガンとコールは厳しく批判され、アメリカのレーガン政権は、上下両議会による訪問拒否の議決も手伝い最悪の国内危機に陥る。

「戦争中の加害者という『犠牲者』」と「迫害された犠牲者」の難しい境界が消滅しなかったとき、「政治家たちがその国民を代表して遂行する赦しと忘却の相互行為」(ヤン・アスマン、1999年) は、挫折。

[→ ドイツ連邦政府、<http://www.bundesregierung.de/>、米ジェフリー・ハートマン Geoffrey Hartman (イエール大学) 『道義と政治的諸展望から見たビットブルク』(米1986年)]

5月5日 西独ヴァイツゼッカー第6代大統領「第2次大戦終結40周年演説」(20カ国以上に翻訳、邦訳各種あり)。リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー Richard von Weizsäcker (第6代ドイツ連邦共和国大統領在位1984-89年、89-94年、1920年生まれ) は、世界的に注目を浴びることになった歴史的な演説を連邦議会でおこなう。主題として第一に、1945年5月8日の軍事的「敗戦」を道義的「解放」としてとらえなおす「5月8日解放命題」とともに、「終戦日は敗戦か解放か」という問題提起と解答提示。ドイツ連邦共和

国初代大統領テオドル・ホイスHeuss,T.による規定「1945年5月8日とは、私たちドイツ人一人ひとりにとって最も悲劇的にして疑惑に満ちた歴史の逆説であります。何故か？何故ならば、私たちは一つのことで解放されかつ破壊しつくされたからであります」(1949年5月8日ボンの議会)を論理的に分節化する試みである。[→10年後、戦後50周年の節目にドイツの大論争へと展開6。山本編訳(1994年日本)、ローマン・ヘルツォーク(95年独)、ヴァイツゼッカー(95年日本)、仏のブリジット・ソゼー編(95年独)、ハンス・マイアー(96年仏)、コルネリーセン、アフアーバッハ編(97年独)、シュレーダー(97年独)、クラウス・ナウマン(98年)、バルシュドルフ(99年独)。]

[→ドイツ連邦共和国大統領 <http://www.bundespraesident.de/>、リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー『ドイツからドイツ大統領の演説集ー』(1987年)→[www.dtv.de](http://www.dtv.de)]

第二に、同演説はホロコーストに関して、ユダヤ迫害の進行中に「余りにも多くの人々が現に起こっていることを知ろうとしなかった」こと、「自分の関知するところではないとし、眼をそむけ、黙して語らない」という「良心が麻痺するままに放置する」諸態度の発生を枚挙、そして、ホロコーストと命名される諸結果が判明したとき、「知りませんでした」と申し立てたことを問題視。「ヴァイツゼッカー氏は、無関心と忘れやすさという究極の敵と対決した」(「ニューヨーク・タイムズ」紙、1985年5月9日付)という評価は見られたものの、研究者やメディアともに、ドイツ人による「不作為の罪」(Unterlassungsschuld; sins of omission)が問われたという原理的な受け止めは直ちに起こらない。

第三に、「想起する(Erinnern)とは、出来事が内面として定着するように真摯に出来事

を思い浮かべることである」と再定義し、「想起なくしてユダヤ人との人間としての和解は存在しない」と、「想起」を鍵概念として提起。[→イスラエルとの大統領相互公式訪問として、同年10月 西独大統領、戦後の建国以来初めてイスラエルに公式訪問。87年4月 イスラエル大統領ハイム・ヘルツォグ Chaim Herzog (1918年生まれ)、戦後の建国以来初めて西独に答礼公式訪問。ヘルツォグは、1945年26歳のイギリス軍ユダヤ系将校として、その解放に加わったベルゲン・ベルゼン収容所跡を42年ぶりに再訪、「いかなる赦しも、いかなる忘却も私は携えて来たわけではない。死者のみが赦す権利を持ち、生きている者に忘却は許されない」と明言。[[www.spiegel.de](http://www.spiegel.de) 『シュピーゲル』誌、ユルゲン・ライネマン Jürgen Leinemann (1937年生)によるルポルタージュ「見えざる壁の如くに」1987年4月13日号、ヘルムート・シュルツェ Schulze, H. 『リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーー或るドイツ人大統領ー』(1987年)にも所収。]

この年、ケーラー-Köhler, L., ザーナー-Saner, H. 編『ハンナ・アーレントとカール・ヤスパーズによる往復書簡集 1926—1969年』(英訳は1992年)。往復書簡は、一度1933年ナチ政権の誕生とともに途絶え、第2次大戦後1945年に再開される。ハイデルベルク大学でヤスパーズ Karl Jaspers (1883—1969年)を師としていたユダヤ系ドイツ人アーレント Hannah Arendt (1906—1975年)はその間、パリへの亡命、強制収容所体験、ニューヨークへの亡命という「国家なき民 a stateless person」としての体験下にあり、一方ユダヤ系の妻を持つヤスパーズは、教授職の剥奪、出版禁止という身であった。双方はともに自覚的なカント主義者として戦後、自らが経験したナチズムの罪と「全体主義」をどのようにとらえるのか――

ヤスパースは『罪責問題』(1946年)を設定し、「集団の罪という十把ひとからげの概念の拒絶」(アスマン、1999年)に向けて、四つの罪概念を区別し、また、これに対する彼女からの批判と応酬、アーレント自身は『全体主義の起原』(1951年、邦訳1972-74年、新装版1981年)を出版。アイヒマン裁判(1961年)など、同時代史(現代)の思想的消化がヤスパース死去に際しての追悼文まで相互に語られてゆく。[→エリザベス・ヤング=ブリュールYoung-Bruel,E.『ハンナ・アーレント伝』(原著米で1982年、邦訳1999年)。]

壁崩壊以前の「ミッテルオイローパ Mitteleuropa」(中欧)からの声として、ハンガリーのG.コンラッド György Konrad (1933年生まれ)『Antipolitik 反政治—中欧からの省察—』(独訳、前年に英訳)。ハンガリー東部の都市デブレツェン Debrechen でユダヤ系家族の息子として生まれたコンラッドは、両親の強制移送後11歳で地下運動に参加、56年ハンガリー動乱の際、政治的著作のため懲役刑に服し、69年以来小説とエッセイの著作活動、89/90年の壁崩壊とドイツ統一後の91年、ドイツ書籍出版組合平和賞を受賞し、97年以来ベルリン芸術アカデミーの会長。

西独のノーベル文学賞受賞(1972年)作家ハインリヒ・ベル Heinrich Böll 死去(1917年—)。

## 1986年

この年西独で、歴史家論争 Historikerstreit が白熱化。ナチ犯罪は唯一独自か、それとも世界史上の諸犯罪、例えば旧ソ連スターリン体制下の「強制労働収容所 Gulag 群島」、カンボジアのポル・ポト Pol Pot 政権下(1976年、77-79年)での住民虐殺と比較可能か否かをめぐり、歴史修正主義の登場とともに大論争へ発展。[→ルードルフ・アウクスタイン

ン R. Augstein (1923-2002年、雑誌『シュピーゲル』1947年以来の発行責任者)、ブラッハー K.D. Bracher (1922年生、現代史家)編『歴史家論争』(編著、英・仏訳は1988年、邦訳『過ぎ去らない過去』は、抄訳1995年)、ドイツでのゲーテ文化研究所 [www.goethe.de/](http://www.goethe.de/) 4月26日 ソ連のチェルノブイリ原発事故、ソ連による情報提供の不足に各国が批判。

この年ノーベル平和賞に、ホロコーストからの生還者で『夜』など邦訳も多数のエリ・ウィーゼル Elie Wiesel (1928年生まれ)が選ばれる。

ウォルター・ラカー Walter Laqueur (1921年生)『ドイツ人—戦後40年で国民性は変わったか—』(邦訳、原著は、米85年『今日のドイツ—個人的な報告—』)。ヴォルフガング・ゲールラッハ Gerlach, W.『目撃者たちが沈黙したとき』(独1993年第2版、英訳版は米で2000年『そして目撃者たちは沈黙した—告白教会とユダヤ人迫害—』)。

ハンナ・アーレント『イエルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告—』(再刊、65年増補版を69年邦訳、94年新装版)。[→特に副題「悪の陳腐さ」に関し、本書が発刊当時惹起した大論争から36年後その価値の正否をめぐる国際会議の主題となる(ポツダムのアインシュタインフォーラム記録、ガリー・スミス Gary Smith 編『ハンナ・アーレント再訪』(独2000年)。エイアル・シヴァン、ロニー・ブローマン制作映画、2000年。)]

ホロコースト進行中にアメリカ合衆国が取った不作為に関して、米歴史家デイヴィッド・ワイマン Wyman, D.S.『望ましからざる民族—アメリカとヨーロッパ・ユダヤ人の虐殺—』(独訳、原著は米で1984年)で、アメリカ政府は少なくとも1942年末以来、ナチによるヨーロッパ・ユダヤ人虐殺を確実に知っていたにも拘わらず、危機にある人々の一部

さえも救うことを怠った、しかも、故意に怠ったという要約を提出。[→ワイマン『アメリカの不作為の責任Responsibility for America,s Failure』(1991年米で)、同編『ホロコーストに対する世界の諸対応』(1996年、米ジョーンズ・ホプキンス大学出版局)、同『ユダヤ人の遺棄—アメリカとホロコースト、1941—1945年—』(初版84年、新版1998年)、同『死に直面する人種—ペーター・バーグソンPeter Bergson、アメリカそしてホロコースト』(新版04年)。また、モンティ・ペンコウアーMonthly Noam Penkower『ユダヤ人は犠牲にしてもよい』(1983年)、米の先行・後続研究として、ヘンリー・フィーンゴールドHenry L.Feingold (1931年生)『救命の政治—ルーズベルトの行政とホロコースト1938—1945年—』(1970年、増補版1980年)、『目撃に耐えながら—アメリカとそのユダヤ人はどのようにホロコーストに反応したのか—』(1995年)、フランク・ブレッチャーFrank W.Brecher『いやいやながらの連合—ユダヤ人に対するウィルソンからルーズベルトまでのアメリカ合衆国の外交政策—』(1991年)、ウィリアム・ラバンスタインWilliam D.Rubinstein『救命の神話—なぜ民主主義諸国はナチスからユダヤ人を救うことが出来なかったのか—』(1999年) ]。

ドイツによるフランス占領、ヴィシーVicy政権下(1940—44年)南仏リヨン近郊の村でユダヤの子どもたち数千人を匿い救った出来事に関して、フィリップ・ハリーPhilip P. Hallie『罪なき者の血を流すなかれール・シャンボンLe Chambon—sur—Lignon村の出来事—』(邦訳、原著は米で1979年、独訳1990年第3版) [ →日本国内大学図書館 NACSIS → <http://webcat.nii.ac.jp> ]

米で、倫理学・哲学者マイク・マーティン(1946年生)Mike W.Martin『自己欺瞞と道義

性』。

オーストリア、ウィーンのカバレティスト、クヴァルティンガーHelmut Qualtinger (1928年—) 死去。『デア ヘル カルルDer Herr Karl』(本人による実演の音声録音と活字テキスト)、1920年代からのオーストリアの歴史とともに「いつでも俺は上手く振る舞った」と、オーストリアの「普通の人」を造型し、痛烈無比の風刺と皮肉。[→<http://amazon.de/>]

### 1987年

この年4月、アウシュヴィッツからの生還者にして証言の著作活動を続けてきたイタリア人プリーモ・レーヴィPrimo Levi、トリノの自宅で自死(1919年—)。最後の著作『溺れる者と救われる者』(伊1986年から英訳1989年、独訳93年、邦訳00年)。ドイツ民族による全体としての知の不作為を明言。「様々な情報の可能性があったにも拘わらず、大多数のドイツ人は(ユダヤ迫害に関して)何も知らなかったが、それは、無知が好まれた故に、知ろうと欲することがなかったからだ。…口と眼と耳をふさぐことによって、自分の玄関先で起こっていることを知らないということが、そのことに共犯ではないという幻想を創り出した。知ること、そしてこの知をさらに伝えることはナチズムから距離を取る方法であったが、ドイツ民族全体が、この知の行使をしなかったと私は考える。この自覚的な不作為を私は十分に罪あることと見なす」(『プリーモ・レーヴィとの対話』伊1997年から独訳1999年)。

ドイツ書籍出版組合平和賞受賞演説で、ナチ時代米国に亡命の哲学者、『原理＝責任』(79年独語版、84年英語版、90年仏訳、00年邦訳)の著者ハンス・ヨーナスJonas,H. (1903—1993年)『アウシュヴィッツ以降の神概念—或るユダヤ人の声—』(英訳『可死性

と道義性』所収、米96年、仏訳94年)「アウシュヴィッツが起こるままに放置した」神の不作為を問い、独自に「苦悩する神という神概念」を提起。

仏エドガール・モランEdgar Morin(1921年生)『ヨーロッパを考える』(邦訳、原著87年)。

## 1988年

**3月** オーストリア、第三帝国ヒトラー軍による「併合」50周年を迎えるが、ヴァルトハイム大統領の記念演説は断念。前国連事務総長クルト・ヴァルトハイムKurt Waldheimは86年大統領立候補以来、大戦下ドイツ国防軍将校としてバルカン半島で兵役に就き、ナチスとの共犯関係の疑惑故に国際的な非難を浴びる。彼は「その場に居合わせたか、虐殺への関与は無い」という調査委員会の結果に関して不作為の示唆が分からないままであり、また、オーストリア国民、ヒトラー侵略の「最初の犠牲者」という戦後の「建国神話」の自己欺瞞による自己想定崩壊。[→ ロバート・E.ハーズスタイン Herzstein (1940年生)『ワルトハイム—消えたファイル—』(邦訳、89年)。]

**11月11日** 西独で連邦議会議長フィリップ・イエニンガーJenninger,P.は、反ユダヤ主義的な行為「帝国水晶の夜」事件50周年(11月9日)に寄せた演説で、ドイツ人の「共犯」を主題化するが、内容の十分な咀嚼がないために、多くの連邦議会議員により問題とされ、議長職を辞任。[→ 言語学者ハイコー・ギルントHeiko Girth『政治における言語と言語適用』、『政治的演説における態度決定と態度決定の告知—1988年11月10日のフリップ・イエニンガー演説の言語学的研究—』(1993年)]

この年西独、精神分析学者ユルゲン・ミュラー—ホーアーゲンJürgen Müller—Hohagen

『否認され、抑圧され、敢えて語られず—ナチ時代による魂への諸作用—』によって、心理学の面から不作為問題を掘り下げる。ヴァイツゼッカー『想起と和解』(邦訳)。

米フィラデルフィアで、アラン・ローゼンバーグAlan Rosenberg (1939年生)、ジェラルド・マイアースGerald E. Myers (1923年生)編『ホロコーストからの反響—暗い時代に関する哲学的反省—』。ようやく哲学研究者たちによって「集団虐殺(ジェノサイド)とホロコーストに対する哲学的研究のための協会」(SPSGH)が設立。[→ 1997年、その成果がボンでの国際会議で発表:「①目撃と証言、②道義性と倫理、③芸術と詩、④記憶と歴史、⑤表象の危機」という5つの主題の下、22名による論文集。アラン・ローゼンバーグ、デートレーフ・リンケDetlef Linke(1945年生)、ジェームズ・ワトソンWatson,J.編『アウシュヴィッツの同時代的描写—哲学の挑戦—』2000年。]

## 1989年

(1月20日 米大統領に、ジョージ・ブッシュGeorge Bush就任、1924年生)

(2月24日 日本、昭和天皇大喪の礼を国家式典として催し、164カ国の元首級代表が参列)

**5月2日** ハンガリーが、オーストリア国境側の鉄条網を撤去する式典。

(6月3、4日 北京、天安門事件)

**5月24日** 西独、建国40周年記念に、国家式典としてヴァイツゼッカー大統領演説。国家という概念が普遍概念ではなく、ヨーロッパで13世紀から18世紀の終わり、部分的には19世紀始めにヨーロッパ史の特殊な諸前提と諸起動力を基にして発生し、以来、その具体的な成立諸条件から切り離され、全文明世界に拡大普及した政治的な秩序形態の呼称である

ことを確認し、「自由主義的で世俗化された国家（＝近代国家）は、みずから創出することも保証することも出来ない諸前提によって生きていること」（法哲学者ベッケンフェルデBöckenfördeの逆説）を強調。[→ベッケンフェルデErnst Wolfgang Böckenförde「世俗化の出来事としての国家の成立」（論文集『法、国家、自由』1991年所収）。]

**6月5日** ヴァイツゼッカー西独大統領、ニューヨーク・ユニオン神学大学で、政治でも教会でもほとんど取り上げられることがなかった演題「政治における赦し—ユニオン受賞に際して—」を課せられて演説（英語・独語）。[→ヴァイツゼッカー演説集『ドイツからヨーロッパへ』（91年）、『過去の克服・二つの戦後』（94年邦訳）、同じ主題で米ドナルド・シュライバー、1995年。]

**8月** 東独市民が、ハンガリー、オーストリア経由で西独へ集団脱出。

**8月23日** 第2次大戦を可能としたヒトラーHitler（1889—1945年）とスターリンStalin（1879—1953年）による独ソ不可侵条約締結50周年にバルト3国が、3国を縦断する示威行動「人間の鎖」によって、ソ連からの分離独立の意思表示。

**9月1日** 第2次世界大戦勃発50周年の記念行事が、最初の被害国ポーランドでも独自に開催。第2次大戦の開戦記念日に際して、ポーランド人アーダム・クシエミンスキAdam Krzemiński（1945年生）の独訳論文（「ここヨーロッパでは誰一人罪なき者とは主張できない」[「フランクフルター・ルントシャウ」紙]）歴史学会発表のブラッハーKarl Dietrich Bracher（1922年生）論文「第2次世界大戦の歴史的場所」（「フランクフルター・アルゲマイネ」紙）を西独一般紙が掲載し、国民的規模の歴史意識の形成と啓発（ちなみに日本では、「12月8日」は、「意識外追放」のままで

あり、ドイツにおけるあり方とは鋭い対比をなす）。

**10月7日** 東独の建国40周年記念に、ゴルバチョフMikhail Gorbachev（1931年生、1985年3月以来、ソ連共産党書記長）出席。「遅れて来る者は、現実によって復讐される」。この月ライブツィヒ、30万人に及ぶ街頭デモでスローガンが、「我々はここに留まる」「我々が人民だ」から「我々は、ひとつの国民だ」へと変貌し、東独変革からドイツ統一へと潮流の変化を示す。

**10月10日** ドイツ書籍出版組合平和賞に、チェコスロバキアの反体制作家ヴァーツラフ・ハヴェルVaclav Havel（1936年生）が受賞。本人が出国可能も帰国入国許可が出ないであろうという判断のため、フランクフルトのパウルス教会での受賞式は欠席で（ヴァイツゼッカー大統領、コール首相列席の式典）、記念演説は代読「言葉に関してひとこと、始めに言葉ありき」（邦訳翌年）。

**11月9日** 全世界の予想を越えて、ベルリンの壁、実質的崩壊。東欧社会主義諸国の体制転換が続く。東ベルリンの街頭で自前のプラカードに「今日初めて、あの戦争が本当に終わった」と。

**12月2日** 米ソ首脳、マルタ会談で、冷戦時代の終わりを宣言。

この年英で、ジグムント・バウマンZygmunt Bauman（1925年生）『近代とホロコースト』、仏で、ジャック・ロレーヌJacques Lorraine『フランスのなかのドイツ人—アルザス・ロレーヌにおけるナチスのフランス壊滅作戦—』（邦訳、原著は1945年）。米で、ジョン・ロートJohn Roth、マイケル・バーレンバウムMichael Berenbaum編『ホロコースト—宗教的、哲学的含意—』。

ホロコーストに関する先行研究の集大成（抜粋）としてマイケル・マラス編序『ヨー



ロッパ・ユダヤ人の絶滅に関する歴史的な諸論文全9巻』が整う。

「集合的記憶」に関する仏社会学者の古典が英語・独語で復刊、M.アルヴァックス Maurice Halbwachs (1877—1945年)『集合的記憶』(邦訳、1968年原著改訂版、独訳1991年、英訳版1992年)。クリスティアン・マイヤー Christian Meier (1929年生)『アウシュヴィッツから40年』(第2版、独)。J.P.スターン Stern, J.P.『ヒトラー神話の誕生—第三帝国と民衆—』(邦訳、83年版の新装版「第三帝国の人びとは(例えばドイツ人同胞市民の殺害に関して)知ろうと欲しただけ多く、(例えば同国のユダヤ人同胞市民に関して)知ろうと欲しただけ少なく知った。彼らが知らなかった事柄は、明らかな根拠から自分達が知ろうと欲しなかった事柄である。しかし知ろうと欲しないということは常に、知ろうと欲しないと知るだけのことは充分知っているということである」。)ヘルムート・クーン Kuhn, H.「良心」(『国家事典』第7版)。仏モラン『ドイツ零年』(邦訳)。

ラインハルト・コーゼレック Koselleck, R. (1923年生)『過ぎ去った未来—歴史的な諸時間の意味論に寄せて—』(1979年版の復刊)。本書は、次のような構想に立脚する。つまり歴史的な時間への問いは年代記とは別に、設けられ得る。歴史はそれ自身カレンダーや時計の時間ではない独自の時間を持つのか？ 一方では加速と逡巡、比較可能な出来事の繰り返しが存在し、他方では、歴史的な診断と政治的な行動に入り込んで来る予断と予言、予測可能性と願望が存在し、主観的な時間と客観的な時間との間は異なっている——「経験の空間」と「期待の地平」など、経験としての歴史が問われる。

## 終わりに

本稿は、1985年から1989年までの時期を対象としたわけだが、この時期は、主題「過去の克服」に関してどのような位置づけが与えられるだろうか。広く戦後史全般を視野に入れるならば、ドイツの第一期は「恩赦と統合」の時代としてアーデナウアー政権をはさむ1957年まで、次に1958年「ナチ犯罪追及センター」の創設から68年世代による父祖の世代の「沈黙」に対する異議申立てをはさんで1984年までを第二期とし、文学者や個別研究者による取り組みが推進され、そして第三期として、「想起」を鍵概念とする、政治家などの公共圏の問題に入り、たとえば18年間の政権を維持し旧敵国フランス、アメリカとの「和解」を演出するコール首相とヴァイツェッカー大統領の対比、つまり前者は旧敵国との「過去を問題としない」和解の仕草という方向性、後者は過去の想起という方式として単純化することが許されようか。85年の「ビットブルク墓参問題」は、その意味でアメリカ合衆国との宥和を演出したコール方式の甘さと限界が露呈したものであり、自国ドイツ民族自身における独自の自立した諸判断基準を提起した後者のあり方は、その問題提起を国民それ自体に深化させる機会を与えたものであることが判明したと判断出来よう。

一方国際的には、アメリカ合衆国における国立「ホロコースト・ミュージアム」の開館への準備、オーストリアの大統領におけるナチ犯罪関与疑惑の発覚と同時に、オーストリア全体の「戦中と戦後の間」の記憶の持ち方の問題視と自己認識の要求の登場など、「歴史認識」は、いよいよ公共の次元における遺産と試金石となったのである。

そして旧東欧諸国による平和的な体制転換を行う「奇跡の年」といわれる「89/90年」を迎えるが、ここでドイツは、ナチズムの過

去ばかりではなく、もうひとつの過去、すなわち、戦後の社会主義国家による国家犯罪との取り組みに向かうが、その記述は次稿の課題となる。

また理論的には、主犯者と共犯者以外の存在に照準したものとして「不作為の責任」という概念が産み出だされ、「不作為はいかなる範囲で罪となるのか」という問いとして定式化され、これに応じて、「責任」概念の理論的深化も、対象を異にして哲学研究者たちの課題として相即することになったことが、この時期の成果と特徴であると言える。（「壁崩壊と二つの戦後—ドイツの『過去の克服』に関する年代記（2）」に続く）

## 註

<sup>1</sup> 山本 務「ヤスパース『戦争の罪を問う』における罪と責任」（『図書新聞 特集『戦争』と『罪』をめぐって』（図書新聞社、1999年1月1日、通巻2420号）、同「罪責問題・その哲学的展開—『不作為』を中心に—」（『九州看護福祉大学紀要 第1巻、第1号』233—243頁、1999年3月発行）、同「知と罪—『不作為』を中心に—」（同、第2巻、第1号、65—79頁、2000年）、同「作為と不作為—道義的判断の二類型構想に関する中間的考察—」（同、第4巻、第1号、103—152頁）。

<sup>2</sup> 例えば大獄秀夫著『二つの戦後・ドイツと日本』（日本放送出版協会、1992年NHKブックス）、三島憲一著『戦後ドイツ—その知的歴史—』（岩波書店、1991年岩波新書）、石田勇治『過去の克服—ヒトラー後のドイツ—』（白水社、2002年）などが挙げられる。ちなみに日本語による日・独の「戦争責任・戦後責任」を対比させて、それぞれ固有の問題点を洗い上げたものは今日まで、西尾幹二著以外わずか1点、しかも複数の論者による著作に過ぎないという現状である。粟屋憲太郎、田中宏、広渡清吾、三島憲一、望田幸男、山口定著『戦争責任・戦後責任—日本とドイツはどう違うか』（朝日選書、1994年）。

<sup>3</sup> 参照、山本 務訳著『過去の克服・二つの戦後』（日本放送出版協会、1994年NHKブックス705）、20—61頁。

<sup>4</sup> 小熊 英二『民主と愛国』（新曜社、2002年）。なお本書のような或る意味で地味な大著の研究書が多く、の版を重ねて読者に迎えられ、また、学界のみならず「朝日（新聞）論壇賞」など社会的に著名な受賞によって評価されたということは、依然として戦後日本人において、みずからの来歴と現在が未整理のまま検討の対象として存在することを物語っていると考えられる。

<sup>5</sup> ヴァイツェッカー「『二つの戦後』と過去の克服」（山本 務訳・解説、『世界』岩波書店1992年5月号）の「解説」において、筆者は、日本の68年世代が戦後思想の遺産と関わるのが戦後日本の歴史意識の形成にとって最重要事であることを述べたことがある。哲学・思想研究は、経験諸科学に対して「パラダイム（の移動・転換）」提供を促すことが課題であろう。なおヨーロッパにおけるドイツと幾分異なり、東アジアにおける日本の戦後が歴史に照らした自己認識に際して必要な要因は、1945年8月とともに、明治国家を対象化することが求められたということである。たとえば、丸山眞男「超国家主義の論理と心理」（『世界』1946年5月号）は、カール・シュミット『レヴィアタン』を援用し、近代国家の本質を世界観に対する「中性国家であること」に求め、その観点から、日本の明治国家それ自体が世界観の根本を国家が掌握する形態であると分析し、大日本帝国から戦後の日本国家への変貌を論理的に先取りしたように、19世紀の中葉にまで起点を求める必要が生じたことである。

その点、その歴史的起点を対象とする作家大仏次郎『天皇の世紀』（朝日文庫）、また『近代日本総合年表』（岩波書店）の発刊がようやく明治100年に相当する1968年から始まったことも視野に入れるべきであろう。

<sup>6</sup> 第2次世界大戦をみずから惹き起こしたドイツ人にとって、その終戦が「敗戦」として帰結したこと

は世界周知の史実である。戦後ドイツは、この「敗戦」を「解放」として捉え直す道を拓いてきた。それが「何十年も続く習得過程の成果」（ハーバーマス、1995年Jürgen Habermas: *1989 im Schatten von 1945, Zur Normalität einer künftigen Berliner Republik*, in: *Die Normalität einer Berliner Republik*, Suhrkamp, 1995, S.167）とも規定されるわけであるが、戦前を切り捨てることなく、戦前に対する歴史認識の形成とともに、もうひとつの戦後を対置し対質しながらの行程である。

ヴァイツゼッカー戦後40周年演説は、「終戦は、解放か、敗戦か、価値観の崩壊か、零時刻か」という問題設定を行い、敗戦でも解放でもあるという併存の事態の描写から説き起こし、次いで、「敗戦にも拘わらず解放」という論理展開を典型化したのであり、それを受容するドイツ国民層が明確に存在するということが表面化し判明したのが、10年後の戦後50周年であった。この主題に関する同演説のテキスト分析としては、上記拙訳著「論考編」（「それは解放であったのか」180－211頁）を参照。

**Über die Fragestellungen der Weizsäcker—Reden**  
— Chronik der deutschen Vergangenheitsbewältigung 1985—2003 : (1)1985—1989 —

**Tsutomu YAMAMOTO**

Resümee

Zu den großen Themen unserer Zeit gehört eine schwierige Frage: Wie sich eine Nation mit seiner belastenden Vergangenheit auseinandersetzt? Vor diesem Problem stehen viele Länder in der Welt: alle postkommunistische Staaten Mittel—Osteuropas, Frankreich mit dem Vichy—Regime, USA während dem Holocaust, USA nach dem Vietnamkrieg, und Japan der Nachkriegszeit.

In Westdeutschland nach der Nachkriegszeit ist der Fall bemerkenswert. Die Kunstbegriffe, »Vergangenheitsbewältigung und Geschichtsbewältigung«, werden erst seit den sechziger Jahren gegen »das Beschweigen« der fünfziger Jahre (Adenauer—Jahre) regelmäßig verwendet. Entscheidend ist die Bundespräsident Richard von Weizsäcker—Rede von 8. Mai 1985. Dabei geht es um eine Interpretation des Kriegsendes; die Antwort darauf, wessen die Deutschen gedenken; die deutsche Unterlassungsschuld während dem Holocaust; eine Forderung zur Erinnerung der Nazi—Herrschaft; eine Zusammenhang von dem Ende des zweiten Weltkriegs und die Teilung des Deutschlands und Europas.

Das sind grandiose wie fundamentale Fragestellungen, auf die seither das deutsche Volk bis heute im Jahr 2003 reagiert, kritisiert, und beantwortet hat. Aber wie? Und wie Deutschbeobachter in aller Welt, und andere europäische Länder? Die Bemühungen einer Antwortung dauern ihre Zeit und sind tatsächlich Jahrzehnte bis zum Jahr 2003 dauert. Die Ergebnisse produziert jetzt ein neues Fachgebiet »Kulturerinnerung«, »Politik mit der Erinnerung«; die Vertiefung des Begriffs Schuld oder Verantwortung; die Frage, wie weit »Unterlassen« schuld ist, auf den politischen oder moralischen Gebiete usw.

Ich versuche, chronologisch die Geschichten und die Forschungsergebnisse aufführen und aneinanderreihen, aber auch ein bisschen wegweisend, nicht immer systematisch, so zusammenhängend wie möglich.

**Schlüsselbegriffe** : Nachkriegszeit, Holocaust, die Unterlassungsschuld, der 8. Mai 1945, Niederlage und/oder Befreiung